

(C) 埼玉県大宮市、福井県福井市など六地区

(D) 北海道夕張市、群馬県高崎市など一二地区

(E) 北海道上湧別村、富山県生地町など六三地区

(詳細「報告書」参照)

さらに調査はこれらの一〇〇地区の中のそれぞれ無作為に抽出された三地点(市における町、町村における字)について行うこととした。

対象の選定 調査の対象は三歳児—六歳児、各年令性別ごとに一地区五名ずつであるが、地区の指定された三地点の住民登録票を閲覧してそれから無作為に抽出された。このようにして一地区四〇名、一〇〇地区四〇〇〇名の幼児(各年令男女各五〇〇名)について調査を行った。

調査の項目 調査については、別紙のような調査票が作成されたが、これは

ページⅠ 基本的項目

ページⅡ 運動的発達に関する項目

ページⅢ 情緒的発達に関する項目

ページⅣ 社会的発達に関する項目

ページⅤ 知的発達に関する項目

ページⅥ 補充 運動的発達に関する項目

を含んでいる。なお調査票はページⅠ—Ⅳが一枚四ページに印刷され、ページⅤ・Ⅵ補充が別紙に印刷されている。

調査員 女子学生を原則とし一地区一名の調査員が担当した。主に協力された学校名をかかげれば左の通りである。

お茶の水女子大学・日本女子大学・東京家政大学・東京文化短期大学・頤栄短期大学その他(詳細「報告書」参照)

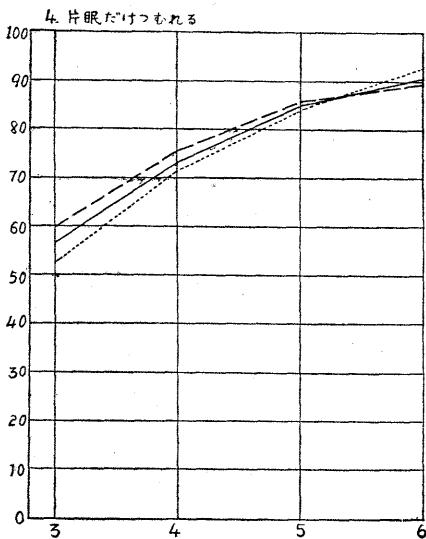
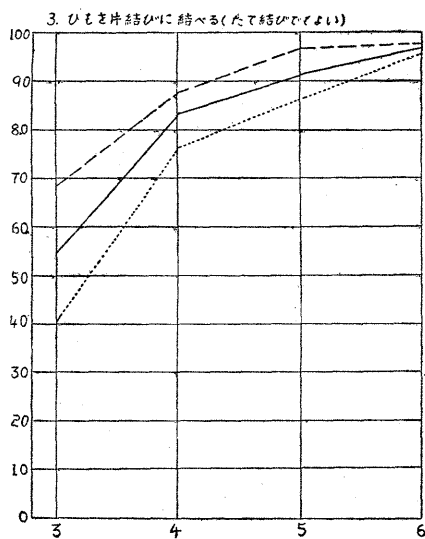
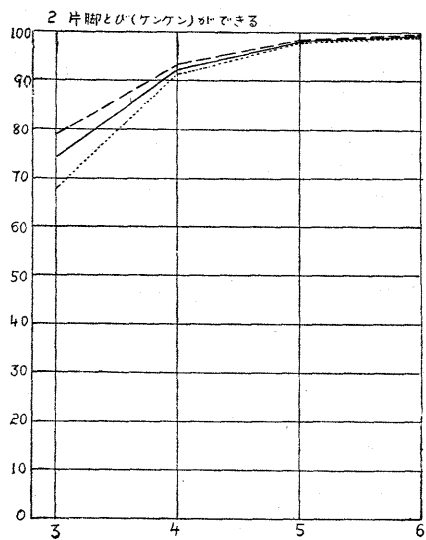
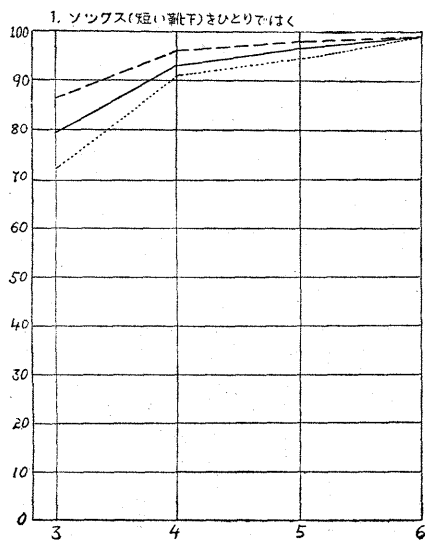
調査の方法 まず調査員が選定された対象の家庭を訪問して、幼児の保護者に面接して、調査目的を説明するとともに、調査票Ⅰ—Ⅳの記入を依頼し(場合によっては聴取り調査を行う)日時を定めて再訪し、調査票Ⅰ—Ⅳを回収し、さらに幼児本人についてⅤ・Ⅵの補充について調査し、なお回答の不備について点検補充質問等を行った。不在の場合は再訪し、拒絶の場合はできるだけ協力を求め、いかにしても調査不能の場合に限り、あらかじめ抽出した予備の対象について面接調査することとした。なお調査に要する日数は一地区平均一〇日の予定とされた。

### 三、運動的発達

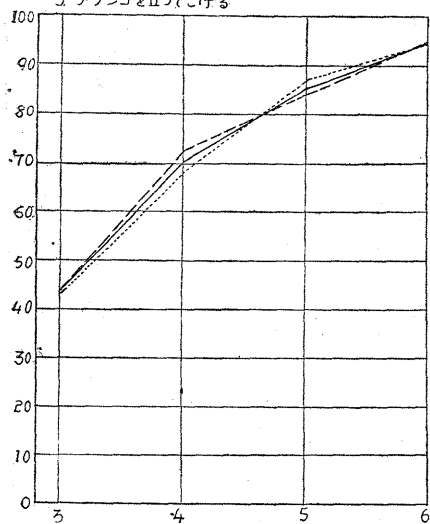
山下 俊 郎

運動的発達を調査するために設定した項目はさきに掲げた二十六の項目で、これらは従来の研究の結果から、三歳ないし六歳の幼児の発達規準を調査するのに適当であると考えられるものを選定したものである。

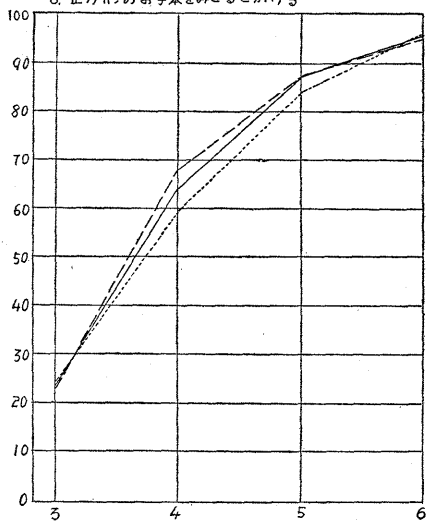
調査の結果は、いずれも発達の傾向をきわめて顕著に示すような結果を得た。統計二十六の項目について、当該年令の通過率七〇—



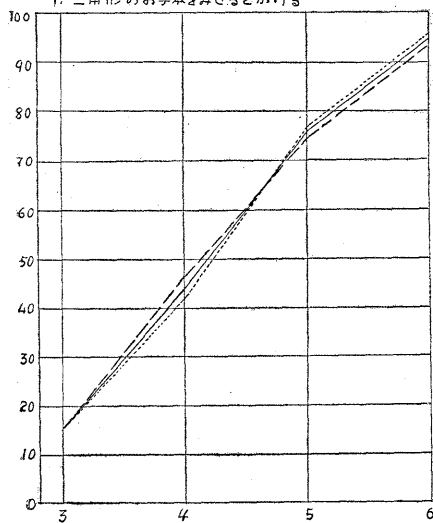
5. フラシコを立ててこげる



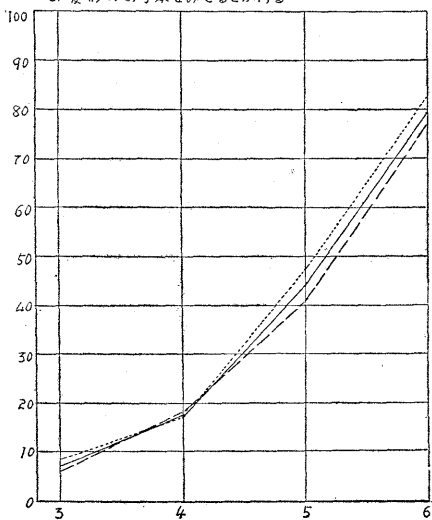
6. 正方形のお手本をみせるとかける



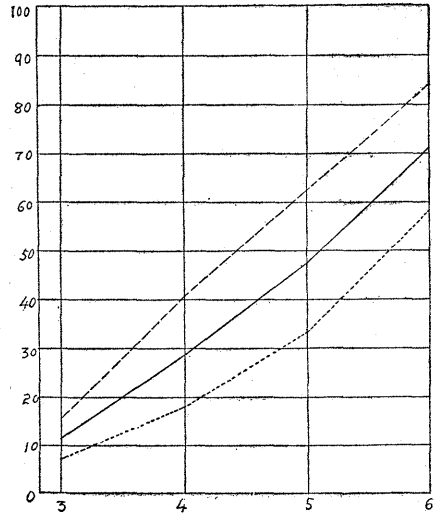
7. 三角形のお手本をみせるとかける



8. 菱形のお手本をみせるとかける



9. 紐を花結び(蝶結び)に結べる



八〇%を示すものをその年の発達規準として考えるという考え方にしたがって、各年令に発達の項目を配当することができるのであるが、これらのうち代表的な例を、全国平均によって年令別に示してみると次の通りである。

三歳のもの——ソックスをひとではく。片脚とび。

四歳のもの——ひもを片結びに結べる。片眼だけつむれる。ブランコを立ててこぐ。

五歳のもの——正方形の手本をみてかける。三角形の手本をみてかける。

六歳のもの——菱形の手本をみてかける。紐を花結びに結べる。これらの発達曲線を示すと図の通りである。(曲線のうち、実線は男女の平均、点線は男児、破線は女児を示す)

なお、全国平均について、左利きの幼児の割合をみると、三歳—八・四%、四歳—五・八%、五歳—八・〇%、六歳—四・五%、平均して六・七%であって、従来見出されている割合とほぼ同様な百分比が示されているのを見ることができた。

## 四、知的発達

村山 貞雄

### 問題の作成

幼児の知的な面の発達規準をつくるために、まず問題の作成がおこなわれた。問題は五回の試案を経て、六回目に成案した。

### 第一次案

第一回の試案は、知能検査の問題に似た内容で、しかも父兄に質問して分かるような内容をもって構成した。

その内容は、(1)模倣による描画、(2)数量計算、(3)絵の記憶、(4)注意力、(5)推理力よりなっている。

しかし、種々検討した結果、つぎのような内容を考えて、これは知的問題作成の今後の大綱とした。

一、問題は、狭義の知能に限定せず、知的な面の発達をみるものをもって構成すること。すなわち、知識、常識などで、知能と関係の深いものを含む。